

『続茶経』試訳(其七)

抄録

中国では、古くより喫茶の風習が広まり、文化として成熟するなかで、茶書が著された。茶書の内容は多岐にわたるが、茶の歴史から産地、栽培、製造、飲用、茶具、効用など、茶に関わる事柄を総合的に記した書物の一つに、清の陸廷燦が著した『続茶経』がある。これは、唐の陸羽が著した最古の茶書『茶経』の続篇を標榜し、『茶経』の体例に倣って諸書の記載を輯録、整理したものである。『続茶経』は長期に渡る膨大な記載を収録しており、また、散佚した書物の記載も含まれるなど、茶文化を知る上で欠かすことのできない書物の一つである。しかし、これまで本書が日本語に翻訳されたことはなかった。

そこで、後の茶文化研究に資することを目的として、その日本語訳を試みたい。なお、紙幅に限りがあるため、本稿では『続茶経』の「六之飲」の第四三九条〜第五二三条までの訳を示した。

キーワード

『続茶経』、陸廷燦、清、茶書、中国茶文化、翻訳

〈目次〉

はじめに

「六之飲」 第四三九条―第五二三条

A Trial Translation of *Xu Chajing* (『續茶経』)

Tanaka, Misa Harada, Makoto

Abstract

Historically, books of tea, consisting of various topics, were written in China, while customs of tea were formed, spread, and matured across the country. *Xu Chajing* (『續茶経』) written by Lu Tingcan (陸廷燦) in the Qing (清) era is one of them. It includes producing areas, cultivation, production, drinking, utensils, effects concerning tea. It followed *Chajing* (『茶経』) written by Lu Yu (陸羽) in Tang (唐) era. So it was titled *Xu Chajing* (『續茶経』) as sequel to *Chajing* (『茶経』). It contains lots of extracts related to tea, but some of them have been scattered and lost. Therefore, it is valuable literature in the field of studying Chinese tea culture. But it has not been translated into Japanese yet. Our aim is to contribute to the progress of research on Chinese tea culture by showing its translation. In this time, we have translated its sections 439–523 in chapter six (「六之飲」) in this trial.

Key Words

Xu Chajing (『續茶経』), Lu Tingcan (陸廷燦), Qing (清), books of tea, Chinese tea culture, translation

田中美佐
近畿大学短期大学部教授

原田信
近畿大学経営学部准教授
2023年9月25日受理

はじめに

唐代の陸羽が『茶経』を著して以後、中国では様々な茶書が著された。なかでも清の陸廷燦が編纂した『統茶経』は、茶の歴史から産地、栽培、製造、飲用、茶具、効用など諸書の記載を博搜しており、一大類書といふべき書物である。中国における茶文化の多様なありさまを通覧し、その形成と変遷の過程を知る上で、『統茶経』は十分な参照価値があると言えよう。しかし、本書は一部の記載を除き、これまで翻訳されることはなかった。そこで、訳者はその全訳を試みることにした。

翻訳にあたっては、国立公文書館内閣文庫所蔵の『原本茶経』雍正十三年陸氏寿椿堂家刻本（『茶経』と『統茶経』の合刻本、請求記号は子〇六八―〇〇三）を底本とし、原文と和訳をそれぞれ示した。ただし、『統茶経』は版本間に、また引用文とその原本との間に異同が見える。そこで、方健校注『中国茶書全集校証』（中州古籍出版社、二〇一五年）収録の「校証」に基づき、底本とした『統茶経』には見えるが、引用原典に無い文字は〔 〕中に示し、『統茶経』における脱字・脱文（あるいは省略）は（ ）中に補った。また、底本と他の版本、あるいは底本と引用原典との間の文字の異同は該当箇所に下線を引いた上で（ ）中に示した（脱字・脱文・異同が多い場合は必要最低限を示すに止めた）。以上の衍字・脱字・

脱文・異同は、訳に適宜反映させた。このほか、陸廷燦によって記された、あるいは引用原典の割注は原文の（ ）中に示し、和訳の（ ）には原文割注の訳および筆者が補った人名、地名、年代などの説明を示した。詩の和訳はまず訓読を示し、（ ）に和訳を示した。

『統茶経』の内容は陸羽『茶経』の体例に従い、「一之源」「二之具」「三之造」「四之器」「五之煮」「六之飲」「七之事」「八之出」「九之略」「十之図」に分かれており、末尾に「茶法」が附されている。これに序や凡例を加えると、全体の文字数は十万字近くある。本稿の紙幅は限られるため、以下では「六之飲」のすべてにあたる第四三九条から第五二三条までを訳出した。これより前の訳は本誌第五十巻一号～五十五巻第一号までに掲載されている。

なお、訳出にあたって主に参照した文献は次の通りである。

【日本語】

久保天随・鈴木虎雄等 訳解『統国訳漢文大成』「文学部」（国民文庫刊行会、一九二八～一九三二年）

長澤規矩也 編『和刻本漢詩集成』（汲古書院、一九七四～一九七九年）

布目潮風・中村喬 編訳『中国の茶書』（東洋文庫二八九、平凡社、

一九八五年）

布目潮風 編『中国茶書全集』(汲古書院、一九八七年)

石川忠久『茶をうたう詩「詠茶詩録」詳解』(研文出版、二〇一一年)

【中国語】

鄭培凱・朱自振 主編『中国歴代茶書匯編校注本』(商務印書館〔香港〕、二〇〇七年)

姜欣・姜怡今 訳『漢英対照 茶経・続茶経』(湖南人民出版社、二〇〇九年)

張峰書 整理『茶経・続茶経』(万卷出版公司、二〇〇九年)

郭孟良 注釈『茶経・続茶経』(中州古籍出版社、二〇一〇年)

楊東甫・楊驥 編著『中国古代茶学全書』(広西師範大学出版社、二〇一一年)

朱自振・沈冬梅 編著『中国古代茶書集成』(上海文化出版社、二〇一〇年)

方健 校注『中国茶書全集校証』(中州古籍出版社、二〇一五年)

朱剛 訳注『茶経・続茶経』(北京時代華文書局、二〇一九年)

杜斌 訳注『茶経・続茶経』(中華書局、二〇一九年)

續茶経巻下

嘉亭陸廷燦 幔亭 輯

六之飲

第四三九条

【原文】

盧仝茶歌、日高丈五睡正濃、軍將扣門驚周公。口傳諫議送書信、白絹斜封三道印。開緘宛見諫議面、手闕月團三百片。聞道新年入山裏、蟄蟲驚動春風起。天子未嘗陽羨茶、百草不敢先開花。仁風暗結珠蓓蕾、先春抽出黃金芽。摘鮮焙芳旋封裏、至精至好且不奢。至尊之餘合王公、何事便到山人家。柴門反闕無俗客、紗帽籠頭自煎吃。碧雲引風吹不斷、白花浮光凝碗面。一椀喉吻潤、二椀破孤悶、三椀搜枯腸、惟有文字五千卷。四椀發輕汗、平生不平事、盡向毛孔散。五椀肌骨清、六椀通仙靈、七椀吃不得也、唯覺兩腋習習清風生。

【和訳】

唐の盧仝「茶歌(『筆を走らせて孟諫議の新茶を寄するに謝す』詩)」には次のようにある。「日高きこと丈五 睡正に濃し、軍將門を叩きて周公を驚かす。口に伝う 諫議書信を送ると、白絹斜に封ず 三道の印。緘を開けば宛も諫議の面を見るがごとく、手に関す月団三百片。聞道くならず新年山裏に入れば、蟄虫驚動して春風起

こと。天子未だ陽羨の茶を嘗めざれば、百草敢て先ず花を開かず。仁風暗に結ぶ 珠の蓓蕾、春に先んじて抽出す黄金の芽。鮮を摘み芳を焙りて旋ち封裏す、至精至好 且つ奢らず。至尊の余 王公に合う、何事ぞ 便ち山人の家に到れる。柴門反て関して俗客無し、紗帽頭を籠みて自ら煎吃す。碧雲風を引きて吹き断えず、白光を浮かべて椀面に凝る。一椀 喉吻潤い、二椀 孤悶を破り、三椀 枯腸を搜れば、惟だ文字五千卷有るのみ。四椀 軽汗を発し、平生不平の事、尽く毛孔に向て散ず。五椀 肌骨清く、六椀 仙靈に通ず、七椀 吃し得ざるなり、唯だ覚ゆ 両腋習習として清風生ずるを。（日が高くのぼった昼過ぎ、深い眠りにしていると、使いの部将が表の戸を叩くのですっかり目を覚ましました。諫議大夫の孟殿からのたよりだとおっしゃる。白絹に包み斜めに封をして、三つの印が押しにあります。封を開ければ、さながら諫議殿のお顔を見るようで、一緒に贈っていた丸い団茶三百個を手にとり眺めてみました。聞くに、新年に山へ入ると、冬ごもりしていた虫が目覚めて春を告げる風が吹き起こり、天子様が陽羨の茶をお召しにならなければ、草木は花を咲かそうとしないとか。天子様の教化を受けて、茶樹は知らぬ間に美しい蕾を結び、春に先だち黄金色の芽を伸ばすのでしょうか。その香り高い新芽を摘んで焙じ、すぐさま包むとは。茶は世で最も素晴らしい草木ですが、分をわきまえて目立とうとはしません。これほどの茶は、そもそも天子様がその余り

を下賜されるものだから、王公にこそふさわしいものです。私のような隠者の家に届けられるとは、一体何事でしょう。陋屋は常に扉を閉ざしており、俗人は訪ねて来ません。そこで、私は紗の帽子を被って頭を隠し、一人静かに煎じて飲みます。青い雲のような湯気が風を呼び込んでゆらゆらと立ち上り、白い泡は照り返してつややかに、茶椀一面に浮かび上がります。一杯でのどや口が潤い、二杯で孤独感や煩悶を解消し、三杯飲んでこの非才の腹の中をさぐってみれば、老子のいう無為自然の思があるばかり。四杯でうっすらと汗をかき、日頃の不平不満がすべて毛穴から出て消し飛んでいきます。五杯で身体が清らかになり、六杯で仙界へ通じるのです。七杯はもう飲めず、ただ両脇から涼やかな風がそよぎ出すのを感じるだけです。」

第四四〇条

【原文】

唐馮贄記事珠、建人謂鬪茶曰茗戰。

【和訳】

唐の馮贄『記事珠』（馮贄『雲仙雜記』の誤り）には次のようにある。「建州（現在の福建省建瓯市）の人は鬪茶のことを茗戦という。」

第四四一条

【原文】

北堂書鈔、杜育荈賦云、茶能調神和内、解倦除慵。

【和訳】

唐の虞世南『北堂書鈔』所収の西晋の杜育「荈賦」には「茶は精神や体内の機能を調え、疲れを解消し、物憂さを取り除く」とある。

第四四二条

【原文】

續博物志、南人好飲茶、孫皓以茶與韋曜代酒。謝安詣陸納、設茶果而已。北人初不識此、唐開元中、泰山靈巖寺有降魔師、教學禪者以不寐法、令人多作茶飲、因以成俗。

【和訳】

北宋から南宋にかけての李石『続博物志』には次のようにある。「南方の人は喫茶を好み、呉主の孫皓は茶を臣下の韋曜に与えて、酒の代わりとさせた。東晋の謝安が陸納のもとを訪ねた際、陸納は茶と茶請けを並べてもてなすだけであった。北方の人は当初、茶のことを知らなかったが、唐の開元年間（七一二～七四一）、泰山（現在の山東省中部にある山）の靈巖寺に降魔巖禪師という高僧がおり、

禪を学ぶ者に、眠らない方法として盛んに茶を飲ませた。このため、喫茶が習慣となった。」

第四四三条

【原文】

大觀茶論、點茶不一、以分輕清重濁、相稀稠得中、可欲則止。桐君錄云、若（茗）有餗、飲之宜人、雖多不爲貴也。

【和訳】

北宋の徽宗『大觀茶論』には次のようにある。「茶を点てる方法は一つではなく、軽、重、清、濁に分けられる。点てる際は、濃淡の加減がほどよいところでやめる。『桐君録』には『茶湯に浮く泡は、飲めば健康に有益である。だが、泡が多いから価値があるというわけではない』とある。」

第四四四条

【原文】

夫茶以味爲上、香甘重滑、爲味之全。惟北苑壑源之品兼之、卓絶之品、眞香靈味、自然不同。

【和訳】

『大観茶論』には次のようにもある。「茶は風味を第一とし、香り、甘み、重み、滑らかさが具わっていれば完全な風味となる。これらの要素は、北苑と壑源（ともに現在の福建省建瓯市）に産する茶だけが兼ね具えている。品質のぬきんでた茶には、本物の香りと人知を超えた味があつて、他の茶とはおのずと異なる。」

第四四五条

【原文】

茶有眞香、非龍麝可擬、要須蒸及熟而壓之、及乾而研、研細而造、則和美具足。入蓋、則馨香四達、秋爽洒然。

【和訳】

『大観茶論』には次のようにもある。茶には本物の香りがあり、龍涎香や麝香と比べることはできない。この香りを引き出すには、茶芽を十分に蒸してからしぼって水気を切り、乾燥させて葉研ですりつぶし、細やかにすりつぶしてから型に入れて押し固める必要がある。こうすれば、茶の香りは調和と美しさとともに具える。茶碗に入れると、素晴らしい香りが四方に広がり、それは秋の気候のように爽やかで清々しい。

第四四六条

【原文】

點茶之色、以純白爲上眞。青白爲次、灰白次之、黃白又次之。天時得于上、人力盡于下。茶必純白。青白者、蒸壓微生。灰白者、蒸壓過熟。壓膏不盡、則色青暗。焙火太烈、則色昏黑。

【和訳】

『大観茶論』には次のようにもある。「点てた茶は、純白が最上で本物の色である。青白がこれに次ぎ、そして灰白が次ぎ、さらに黄白が次ぐ。よい気候や時期に恵まれ、人の力を尽くしたならば、茶の色は純白となる。青白いのは蒸しとしぼりがあまく、灰白は蒸しとしぼりが過ぎる。型での押し固めが弱いと色は青暗くなる。また、焙じ過ぎると黒くなる。」

第四四七条

【原文】

蘇文忠集、予去黃十七年、復與彭城張聖途、丹陽陳輔之同來。院僧梵英葺治堂宇、比舊加嚴潔、茗飲芳冽。予問、此新茶耶。英曰、茶性、新舊交則香味復。予嘗見知琴者言、琴不百年、則桐之生意不盡。緩急清濁、常與雨暘寒暑相應。此理與茶相近、故并記之。

【和訳】

北宋の蘇軾『蘇文忠集』（所収の「万松岭の恵明院の壁に題す」）には次のようにある。「私は黄州（現在の湖北省黄冈市）を離れること十七年、再び彭城（現在の江蘇省徐州市）の張聖途（名は天驥）、丹陽（現在の江蘇省丹陽市）の陳輔之（名は輔）とともに恵明院を訪れた。僧の梵英が堂宇を修繕し、以前よりも荘嚴な雰囲気を増しており、茶を飲むと香りがよく立つ。私が『これは新茶でしょうか』と尋ねると、梵英は『茶の性質は、新旧交わる時期のものだと、よい香りが広がります』と答えた。私がかつて琴に熟達した人の話を聞いたことがある。それによると、琴は百年たたなければ、桐の生気が尽きない。このため、音色の緩急清濁は、常に天候や寒暖に応じて変化するという。この道理は茶のそれと近いので、併せて記した次第である。」

第四四八条

【原文】

王叢集外臺秘要有代茶飲子詩云、格韻高絶、惟山居逸人乃當作之。予嘗依法治服、其利膈調中、信如所云。而其氣味乃一帖煮散耳、與茶了無干涉。

【和訳】

（北宋の蘇軾『東坡志林』には次のようにある。）「唐の王叢が集録した『外台秘要』には『茶飲子に代す』詩がある。これは格調や氣韻が卓絶しており、山に住む隠者でこそ作り得る詩である。かつて、私はこの方法によって煮た茶を服用したところ、胸のつかえをとり体調を整えることができ、確かに詩にある通りであった。しかし、その匂いは一袋の葉草を煮出したようので、茶とは全く別物であった。」

第四四九条

【原文】

月兔茶詩、環非環、玦非玦、中有迷離玉兔兒、一似佳人裙上月。月圓還缺缺還圓、此月一缺圓何年。君不見、鬪茶公子不忍鬪小團、上有雙啣綬帶雙飛鸞。

【和訳】

（蘇軾『蘇文忠集』所収の）「月兔茶」詩には次のようにある。「環にして環に非ず、玦にして玦に非ず、中に迷離たる玉兔兒有り、一に佳人裙上の月に似たり。月円くして還た欠け、欠け還た円し、此の月一たび欠けて円くなるは何れの年ぞ。君見ずや、鬪茶の公子小団を鬪わしむるに忍びず、上には綬帯を双啣する双飛の鸞有り。」

（環のようで環はなく、玦のようで玦でもない。中には月に住むという玉兔がぼんやりと見え、美人の服のすそにある月の模様にも似ている。月は丸くなっては欠け、欠けては丸くなるが、この月のように丸い団茶は一度欠けたらいつ丸くなるだろう。見てみなさい、闘茶を好む御曹司もこの小さな団茶を闘わせるのは忍びないのだ。この茶の上には、組紐をくわえるつがいの霊鳥が並び飛びぶ模様があらる。）」

第四五〇条

【原文】

坡公嘗遊杭州諸寺。一日飲醞茶七椀、戲書云、示病維摩原不病、在家靈運已忘家。何須魏帝一丸藥、且盡盧仝七椀茶。

【和訳】

（明の朱廷煥『増補武林旧事』には次のようにある。）「かつて蘇軾は杭州（現在の浙江省杭州市）の諸寺を巡り歩いていて、ある日、濃茶を七杯飲んで、戯れに次の詩（「諸仏舎に遊び、一日醞茶七盞を飲み、戯れに勤師の壁に書す」詩）を記した。「病を示す維摩原より病まず、家に在る靈運 已に家を忘る。何ぞ須いん 魏帝一丸の薬、且つ尽くせ盧仝七椀の茶。（病を患った維摩は茶を飲んで病まなくなり、在家の謝靈運は茶を飲んで家を忘れ出家しよう

とした。病を癒すも悟りを開くも、魏の文帝が飲んだという一粒の丸薬など必要ない。ひとまず唐の盧仝のように七杯の茶を飲み干すだけだ。）」

第四五一条

【原文】

侯鯖録、東坡論茶、除煩去膩、世固不可一日無茶。然闇中損人不少、〔故或有忌而不飲者〕。昔人云、自茗飲盛後、人多患氣（不足）、患黃、雖損益相半、而消陰助陽（消陽助陰）、益不償損也。吾有一法、常自珍之（當自修之）。每食已、輒以濃茶漱口、頰膩既去、而脾胃不知。凡肉之在齒間、得茶漱滌、〔乃盡消縮〕、不覺脫去、毋煩挑刺也。而齒性便苦、（若）緣此漸堅密、蠱疾自己矣。然率用中（下）茶、其上者、亦不常有。間數日一啜、亦不爲害也。此大是有理、而人罕知者、故詳述之。

【和訳】

北宋の趙令時『侯鯖録』には次のようにある。「蘇軾（字は東坡）が茶を論じて言った。茶を飲めば心の煩いや倦みを解消できるため、世の人々は一日も欠かすことができない。しかし、茶は知らぬ間に健康をかなり損なってしまう。このため、茶を忌避して飲まない者もいる。昔、ある人が言っていた。喫茶が盛んになってから、

多くの人が呼吸器を患ったり、黄疸になったりした。茶の功罪は相半ばするといえ、陽の気を消滅させ、陰の気を増長させるならば、その害のほうが大きいと。私には茶の飲み方が一つあり、常に実践している。それは、食事を終えるごとに、濃茶で口をすすぐというものである。こうすると、口中の脂を落とし、脾臓や胃腸に影響を及ぼすこともない。そもそも肉が歯に挟まっても、茶で口をすすぐば、縮んで知らぬ間にとれるものであって、爪楊枝でつつく必要はない。歯の性質は『苦』なので、茶の苦味によって次第に堅牢となり、虫歯は自然に治る。しかし、これには中等の茶を用いる。上等な茶はいつも手元にあるわけでもない。茶は数日開けて一服すれば害はない。この方法は大いに理にかなっているのだが、知る者は極めて少ない。そのため、ここに詳しく述べた。」

第四五二条

【原文】

白玉蟾茶歌、味如甘露勝醍醐、服之頓覺沉疴甦。身輕便欲登天衢、不知天上有茶無。

【和訳】

南宋の白玉蟾「茶歌」には次のようにある。「味は甘露の如く醍醐に勝り、之を服すれば頓に覚ゆ、沉疴の甦うを。身軽く便ち天衢

に登らんと欲するも、天上に茶の有るか無きかを知らず。(茶の味は甘露のようで醍醐に勝る。これを服用すれば、にわか大病の苦しみから逃れられる。身体は軽くなり天空に昇ろうとするが、天上には果たして茶はあるのだろうか。)」

第四五三条

【原文】

唐庚鬪茶記、政和三年三月壬戌、二三君子、相與鬪茶于寄傲齋。予爲取龍塘水烹之而第其品。吾聞茶不問團鑄、要之貴新。水不問江井、要之貴活。千里致水、(眞) 僞固不可知、就令識眞、已非活水。今我提瓶走龍塘無數千步。此水宜茶、昔人以爲不減清遠峽。每歲新茶不過三月至矣。罪戾之餘、得與諸公從容談笑、于此汲泉煮茗、以取一時之適、此非吾君之力歟。

【和訳】

北宋の唐庚『鬪茶記』には次のようにある。「政和三年(一一一三)三月壬戌の日、数名の君子とともに、私の書齋『寄傲齋』で鬪茶を行った。私は龍塘の水で茶を煮て、茶の等級に順序をつけた。私が聞くところ、茶は円形の団茶か、方形の鑄茶かを問わず、要は新しいものを貴ぶ。水は川のものか、井戸のものかを問わず、流れていたり湧き続けたりする、動きのある新鮮なものを貴ぶ。千里もの遠

くから水を運んだ場合、それが偽物かどうかなどわかるはずもなく、本物だとわかったとしても、それはすでに新鮮ではない。今、私は瓶を携えて龍塘に行くのに、数千歩も歩かない。この水は茶を煮るのに適しており、昔の人は、清遠峽（現在の広東省清遠市を流れる川）の水にも劣らないと考えた。毎年の新茶は三月には届く。罪を得て惠州（現在の広東省惠州市）で過ごす暇に、友人達とゆつたり談笑し、泉水を汲み茶を煮て一時の憩いとするのは、茶の力ではなかるうか。」

第四五四条

【原文】

蔡襄茶録、茶色貴白、而餅茶多以珍膏油（去聲）其面、故有青黃紫黑之異。善別茶者、正如相工之視人氣色也、隱然察之于内、以肉理（實）潤者爲上。既已末之、黃白者受水昏重、青白者受水詳（鮮）明。故建安人鬪試、以青白勝黃白。

【和訳】

北宋の蔡襄『茶録』には次のようにある。「茶の色は白を貴ぶ。しかし、餅茶の多くは珍膏が塗ってある（油は去声で読む）。そのため、表面の色は青、黄、紫、黒と異なる。茶の鑑別が得意な者は、ちょうど人相見が人の顔色や表情を見るように、茶の表面を観

察して内なる性質を観察し、きめ細やかで潤いのあるものを貴ぶ。餅茶をすり潰した後、黄白色の粉末は湯に入れると暗く重々しい色となり、青白色の粉末は鮮やかで明るい色となる。このため、建安の人は鬪茶の際、青白色が黄白色に勝るとする。」

第四五五条

【原文】

張湏雲谷雜記、飲茶不知起于何時、歐陽公集古錄跋云、茶之見前史、蓋自魏晉以來有之。予按晏子春秋、嬰相齊景公、時食脫粟之飯、炙三弋五卵、茗菜而已。又漢王褒僮約有五（武）陽（一作武都）買茶之語、則魏晉之前已有之矣。但當時雖知飲茶、未若後世之盛也。考郭璞注爾雅云、樹似梔子、冬生葉、可煮作羹飲。然茶至冬、味苦（澀）、豈可作羹飲耶。飲之、令人少睡。張華得之、以爲異聞、遂載之博物志。非但飲茶者鮮、識茶者亦鮮。至唐陸羽著茶經三篇、言茶甚備、天下益知飲茶。其後尚茶成風。圓紇入朝、始驅馬市茶。《德宗建中間、趙贊始興茶稅。興元初、雖詔罷、貞元九年、張滂復奏請、歲得緡錢四十萬。今乃與鹽酒同佐國用、所入不知幾倍于唐矣。》

【和訳】

南宋の張湏『雲谷雜記』には次のようにある。「喫茶がいつ始

まったのかはわからない。しかし、歐陽脩『集古録』の跋文には『茶が歴史に現れる時代からすると、おそらく魏晋南北朝の頃から存在したのだろう』と記されている。『晏子春秋』によると、晏嬰

が斉の景公の宰相となった時、雑穀の飯、鳥の肉や卵を炙ったものをいくらかと茗菜だけを食したという。また、漢の王褒『僮約』には武陽（武都とする書物もある）で茶を買うとあるので、茶は魏晋より前にはあったことになる。しかし、当時は喫茶が知られていたとしても、後世ほど盛んではなかった。郭璞は『爾雅』に加えた注釈のなかで『茶樹はクチナシのようで、冬に葉を生じ、この葉は煮て汁物として飲むことができる』と記している。だが、茶葉は冬になると苦くなるから、汁物として飲むことなどできようか。また、茶は眠気を解消し、睡眠時間を短くする。晋の張華はこの現象を知り、不思議な話として『博物志』に記している。当時は茶を飲む者が少ないのみならず、茶を知る者も少なかったのだろう。唐代になると陸羽が『茶経』三篇を著わし、茶に関して詳しく論じたので、世の人々は喫茶について一層知ることになった。その後、人々は喫茶を重んじ、習慣となった。ウイグルが唐に入朝してからは、茶馬交易が始まった。徳宗の建中年間（七八〇～七八三）、趙贇ははじめて茶税を導入した。興元元年（七八四）の初め、詔を下して茶税を廃止したが、貞元九年（七九三）、張滂が再び茶税の賦課を上奏し、唐は年に緡錢四十万の税収を得た。現在、茶税は塩税、酒税と

ともに国家の財政を助けており、その歳入が唐の何倍になるかわからない。」

第四五六条

【原文】

品茶要録、余嘗論茶之精絶者、其白合未開、其細如麥、蓋得青陽之輕清者也。又其山多帶砂石而號佳品者、皆在南山、蓋得朝陽之和者也。余嘗事閩、乘晷景之明淨、適亭軒之瀟灑、一一皆取品試。既而神水生于華池、愈甘而新、其有助乎。昔陸羽號爲知茶、然羽之所知者、皆今之所謂茶草。何哉。如鴻漸所論、蒸筍併葉、畏流其膏。蓋草茶味短而淡、故常恐去其膏。建茶力厚而甘、故惟欲去其膏。又論福、建爲未詳、徃得之、其味極佳。由是觀之、鴻漸其未至建安歟。

【和訳】

北宋の黄儒『品茶要録』には次のようにある。「私はかつて最も素晴らしい茶について論じたことがある。芽に包まれた二つの小さな葉がまだ開いておらず、その先が細くて麦ののぎのように細いものは、温和で清らかな春の気を受けた茶である。また、砂石が多い山中の土壌で生育し品質が良いとされる茶は、すべて山の南側で生育する。これは、温和な朝日の気を受けたものである。私はかつて

暇にあかせて、清らかな日影をたどって静かな東屋におもむき、茶を一つ一つ試飲した。すると、つばが口中に湧き出し、味は爽やかさを増してより新鮮になった。これは茶の効果であろうか。その昔、陸羽は茶に熟知していると称していた。しかし、陸羽が知っていたのは、すべて今でいう草茶（葉の形状のままの茶）である。これはなぜか。陸羽が論じているように、当時は蒸した茶の芽と葉を広げて、その汁液が流れ出ないようにした。これは、草茶の風味の余韻が短く淡薄なので、常に茶葉の精髓を含む汁液が流れ出るのを恐れたのである。一方、建安の茶は風味が濃厚なので、その汁液を除こうとする。また、陸羽は福州や建安の茶について、詳しくはわからないがよく入手しており、その風味は極めてよい、と論じている。この記述からして、陸羽は建安に行ったことがなかったのではないか。」

第四五七条

【原文】

謝宗（可）論茶、候蟾背之芳香、觀蝦目之沸湧。故細漚花泛、浮餗雲騰、昏俗塵勞、一啜而散。

【和訳】

元の謝宗可『論茶』には次のようにある。「茶を炙って、表面に

ガマの背のような凹凸が浮き上がって芳香がたつのを待ち、湯を沸かして海老の眼のように細やかな泡がたつ頃合いを見る。こうすることで、茶碗には細やかな泡が花のように浮かび、湧き上がる雲のように広がる。世俗の疲れや悩みは、一口飲めば消え去ってしまう。」

第四五八条

【原文】

黄山谷集、品茶一人得神、二人得趣、三人得味、六七（七八）人是名施茶。

【和訳】

北宋の黄庭堅『黄山谷集』（明の陳繼儒『茶話』の誤り）には次のようにある。「茶を味わうに、一人だと優れた精神を体得できる。二人であれば雅趣を体得できる。三人であれば茶の真の風味を体得できる。六、七人となると、人様に茶を施し浪費するだけである。」

第四五九条

【原文】

沈存中夢溪筆談、芽茶、古人謂之雀舌、麥顆、言其至嫩也。今茶之美者、其質素良而所植之土又美、則新芽一發、便長寸餘（許）、

其細如鍼。惟芽長爲上品、以其質幹土力皆有餘故也。如雀舌、麥顆者、極下材耳。乃北人不識、誤爲品題。予山居有茶論、且作嘗茶詩云、誰把嫩香名雀舌、定來北客未曾嘗、不知靈草天然異、一夜風吹一寸長。

【和訳】

北宋の沈括（字は存中）『夢溪筆談』には次のようにある。「新芽の茶を、古の人は雀舌とか麦顆と称した。これは、新芽が最も新鮮でみずみずしいことを形容したのである。今のすぐれた茶は、もとより品質がよく、生育する土も肥沃である。こうであるから、新芽が出ると、すぐ一寸余りに成長し、針のように細い。芽は長く伸びたものが上等である。これは茶樹の幹や土壌の養分に余力があるためである。短い雀舌や麦顆は、極めて劣っている。北方の人はこのことを知らず、茶の等級を誤って定めている。私は山に隠棲して『茶論』を著したほか、かつて次のような茶の詩を詠んだ。『誰か嫩香を把りて雀舌と名づく、定め来たる北客 未だ曾て嘗めず、知らず 靈草 天然異なるを、一夜風吹けば一寸長し（みずみずしく香り高い茶の芽を雀舌と名づけたのは一体誰であろう。いつもやって来る北方の人は本物の茶を味わったことがない。だから茶の天性が優れたものであることを知らないのだ。本物は一晚風が吹けば、その芽は一寸伸びる。）』

第四六〇条

【原文】

遵生八牋、茶有眞香、有佳味、有正色。烹點之際、不宜以珍果、香草雜之。奪其香者、松子、柑橙、蓮心、木瓜、梅花、茉莉、薔薇、木樨之類是也。（奪其味者、牛乳、番桃、荔枝、圓眼、枇杷之類、是也。）奪其色者、柿餅、膠棗、火桃、楊梅、橘餅（橙橘）之類是也。凡飲佳茶、去果方覺清絶、雜之則味無辨矣。若欲用之、所宜則惟核桃、榛子、瓜仁、杏仁、欖仁、栗子、雞頭、銀杏之類、或可用也。

【和訳】

明の高濂『遵生八牋』には次のようにある。「茶には眞の香り、よき味、正しい色がある。茶を淹れる際は、珍果や香草を混ぜてはいけない。茶の香りを妨げるのは、松の実、柑橘、蓮子心（蓮の種の胚芽）、モッコウ、梅の花、マツリ、バラ、モクセイの類である。（茶の味を妨げるのは、牛乳、バントウ、レイシ、リュウガン、ビワの類である。）茶の色合いを妨げるのは、干し柿、蒸したナツメ、火桃、ヤマモモ、橘餅（柑橘類の実を砂糖で煮た菓子）の類である。よい茶を飲むとすれば、これらの茶菓子を除くことで、その清らかさを感じることができる。茶菓子を混ぜると、味の良し悪しを判別することはできない。茶菓子を留意したいのであれば、

クルミ、ハシバミ、ウリの種、アズノ種、カンランの種、クリ、ミズブキの実、ギンナンの類がよいだろう。」

第四六一条

【原文】

徐渭煎茶七類、茶入口、先須灌漱、次復徐啜、俟甘津潮舌、乃得眞味。若雜以花果、則香味俱奪矣。

【和訳】

明の徐渭『煎茶七類』には次のようにある。「茶を口に含む際は、まず口をゆすぎ、それからゆっくりと飲み、旨味が舌を潤すのを待つ。こうすると眞の味を感じることができる。もし、果物や木の実を口にしてしまうと、茶の香りと味はともに妨げられてしまう。」

第四六二条

【原文】

飲茶宜涼臺靜室、明牕曲几、僧寮道院、松風竹月、晏坐行吟、清談把卷。

【和訳】

『煎茶七類』には次のようにもある。「涼しい高殿や静かな部屋、

明るい窓に木の湾曲を生かした机、寺院や道観の坊舎、松林を吹き抜ける風や竹林に注ぐ月の光、静座して詩を吟じること、清談や讀書、これらは喫茶に適している。」

第四六三条

【原文】

飲茶宜翰卿墨客、緇衣羽士、逸老散人、或軒冕中之超軼世味者。

【和訳】

『煎茶七類』には次のようにもある。「文人や墨客、僧侶や道士、老いた隠者や世事に関わらぬ自由人、あるいは官吏でも俗事を超越した者、このような人々と茶を飲むのが好ましい。」

第四六四条

【原文】

除煩雪滯、滌醒破睡、譚渴書倦、是時茗椀策勲、不減凌烟。

【和訳】

『煎茶七類』には次のようにもある。「苛立ちを取り除き消化不良を解消する、酔いや眠気を覚ます、友と語らう際の喉の乾きを癒し、読書に倦む心情を一新する、このような時に一杯の茶が立てる

功績は、唐の凌煙閣に描かれた建国の功臣にも劣らない。」

第四六五条

【原文】

許次杼茶疏、握茶手中、俟湯入壺、隨手投茶、定其浮沉（薄）。然後瀉啜、則乳嫩清滑而馥郁于鼻端、病可令起、疲可令爽。

【和訳】

明の許次杼『茶疏』には次のようにある。「茶葉を手でつかみ、湯が沸いたら急須に注ぐ。すぐさま茶葉を投じ、茶葉がすっかり湯に沈むのを待つ。それから碗に注いで飲む。すると、その風味は新鮮で清らか、芳香が鼻腔に広がる。病を患う人は癒えて起き上がり、疲れた人は疲労が解消され爽快になる。」

第四六六条

【原文】

一壺之茶、只堪再巡。初巡鮮美、再巡甘醇、三巡則意味盡矣。余嘗與客戲論、初巡爲婷婷孌孌十三餘、再巡爲碧玉破瓜年、三巡以來、綠葉成陰矣。所以茶注宜小、小則再巡已終。寧使餘芬剩馥尚留葉中、猶堪飯後供啜之用。

【和訳】

『茶疏』には次のようにもある。「急須一口分の茶を淹れるならば、味わうに堪えるのは二煎目までである。一煎目は新鮮で風味がよく、二煎目は旨味が濃厚だが、三煎目になると風味が尽きてしまう。かつて私は客と戯れに論じて、一煎目に淹れた茶の風味は十三歳くらいの美しい少女、二煎目は十六歳くらいの純粋な女性、三煎目は青春を過ぎ子供を育てる女性に喩えた。このため、急須は小さいものが良い。小さければ二煎目で飲み終えることができる。二煎目を淹れ終わった後の茶葉は、まだ香りが残っていても、食事後のうがいに供するくらいしかない。」

第四六七条

【原文】

人必各手一甌、毋勞傳送。再巡之後、清水滌之。

【和訳】

『茶疏』に次のようにもある。「茶を飲む際は、必ず一人一人茶碗を持ち、一つの茶碗で回し飲む手間をかけてはいけない。二煎目の茶を飲み終わったら、清らかな水で茶碗をすすぐ。」

第四六八条

【原文】

若巨器屢巡、滿中瀉飲、待停少温、或求濃苦、何異農匠作勞、但資口腹。何論品賞、何知風味乎。

【和訳】

『茶疏』には次のようにもある。「もし大きな急須で何煎も茶を淹れると、急須一杯に湯を満たしてから茶碗に注いで飲むことになり、飲むのを少しでも止めると茶が冷めてしまったり、濃く苦くなったりする。これでは、農民や職人が労働の際、乾きを癒し腹を満たすただけに飲む茶と変わらない。このような飲み方をして、茶の味わい方を論じたり、真の風味を知ったりすることなど、どうしてできようか。」

第四六九条

【原文】

煮泉小品、唐人以對花啜茶爲殺風景。故王介甫詩云、金谷千花莫漫煎、其意在花非在茶也。余意以爲、金谷花前信不宜矣、若把一甌、對山花啜之、當更助風景、又何必差兒酒也。

【和訳】

明の田芸衡『煮泉小品』には次のようにある。「唐代の人は花を愛でながら茶を飲むと、喫茶の趣を損なってしまうとした。そのため、王安石（字は介甫）の「茶を寄せて平甫に与う」詩には「金谷の千花 漫ろに煎るなかれ（金谷園の美しい花々に気をとられて、心の落ち着かないまま茶を淹れてはならない）」という句がある。その意味は、意識が花に向いてしまい茶の風味に向かなくなってしまう、ということである。私が思うに、金谷園の爛漫たる珍奇な花を前にして茶を飲むのは、たしかに適さない。もしよい茶を注いだ茶碗を手にして、山野の花を眺めながら味わうならば、喫茶の趣を一層増すことになるだろう。さらに美酒で興を添える必要などあるうか。」

第四七〇条

【原文】

茶如佳人、此論最（雖）妙、但恐不宜山林間耳。昔蘇東坡詩云、從來佳茗似佳人、曾茶山詩云、移人尤物衆談誇、是也。若欲稱之山林、當如毛女麻姑、自然仙丰（風）道骨、不浼烟霞。若夫桃臉柳腰、亟宜屏諸銷金帳中、毋令汚我泉石。

【和訳】

『煮泉小品』には次のようにもある。「茶が美人のようだという論じ方は、最も精妙である。ただ、山林に隠棲する者には適さないだろう。宋代の蘇軾の『曹輔が壑源試焙の新芽を寄するに次韻す』詩に見える『従来佳茗は佳人に似たり（よい茶はもともと美人に似ているのだ）』や、曾幾の『逮子、龍團・勝雪茶兩勝を得て以て予に帰る、其の直万錢と云う』詩に見える『人を移す尤物 衆談に誇る（心を惑わすほどの美人は、人々の談義で盛んに自慢される）』という句は、このことである。もしこの論じ方を山林の生活に合わせるなら、毛女や麻姑といった仙女に喩えるべきである。仙女はおのずから非凡な風格と気品を具えており、山中深谷の精神を汚すことがない。もし、桃の花のように見目麗しく、柳のように腰の細い美女に茶を喩えるならば、黄金の糸を織り交ぜた豪華な帳の中で飲むべきであり、そのような論じ方で山水の間に茶を楽しむ私の生活を汚すようなことはさせない。」

第四七一条

【原文】

茶之團者、片者、皆出於碾磑之末。既損真味、復加油垢、即非佳品、總不若今之芽茶也。蓋天然者自勝耳。曾茶山日鑄茶詩云、寶鈴自不乏、山芽安可無。蘇子瞻壑源試焙新茶詩云、要知玉雪心腸好、

不是膏油首面新、是也。且末茶淪之、有屑滯而不爽、知味者當自辨之。

【和訳】

『煮泉小品』には次のようにもある。「団茶や片茶は、どちらも茶葉を白でひいた粉からつくられる。これだけでもすでに茶の真の風味を損なっているのに、そのうえ茶の表面に油を塗る。このため、団茶や片茶は良質な茶ではなく、結局は今の芽茶に及ばない。思うに、加工を施さない天然のままの茶がおのずと勝るのである。曾幾（号は茶山）の『述姪日鑄茶を餉る』詩にある「宝鈴 自ら乏しからず、山芽 安んぞ無かるべき（貴重な鏝茶は十分にあるが、それでも芽茶はなくてはならない）」や、蘇軾の『曹輔が壑源試焙の新芽を寄するに次韻す』詩にある『玉雪心腸の好きを知らんと要せば、是れ膏油首面の新なるならず（宝石のような茶の品質のよさを知らうとするならば、それは油を塗った外面がより美しく見えるからではないことを知るべきである）』は、このことを言っている。しかも、粉末の茶を淹れると、茶葉の屑が口にとどまって口当たりが悪く、すつきりしない。茶の味を理解する者は、自身で区別できるようにしなければならぬ。」

第四七二条

【原文】

煮茶得宜、而飲非其人、猶汲乳泉以灌蒿蕒、罪莫大焉。飲之者、一吸而盡、不暇辨味、俗莫甚焉。

【和訳】

『煮泉小品』には次のようにもある。「茶を煮る方法は適切でも、飲む者が茶の味わい方を知らなければ、清冽な銘水を汲んで臭い野草に撒くようなもので、これほど罪深いことはない。茶を飲むのに、一口で飲み尽くして味わいもしないならば、これほど俗悪なことはない。」

第四七三条

【原文】

人有以梅花、菊花、茉莉花薦茶者、雖風韻可賞、究損茶味。如（有）品佳茶亦無事此。今人薦茶、類下茶果、此尤近俗。是縱佳者、能損茶味、亦宜去之。且下果則必用匙、若金銀、大非山居之器、而銅又生銹、皆不可也（用）。若舊稱北人和以酥酪、蜀人入以白土、此皆蠻飲、固不足貴。

【和訳】

『煮泉小品』には次のようにもある。「茶に梅や菊、茉莉の花を入れて供する者がいる。趣はあるものの、これらの花は香りが強く茶の風味を損なってしまう。良質な茶を味わうならば、このようなことをしてはならない。また、今の人は茶を供する際、茶に乾燥させた果物や木の実といった茶菓子を入れるが、これは俗な方法である。たとえよい茶菓子であっても、茶の風味を損なうのだから、取り除くのがよい。まして、もし茶菓子を入れるならば、茶匙を用いなければならぬ。金や銀の茶匙は山中に隠棲する者が用いるのにそぐわないし、銅では錆が生じるので、いずれもよろしくない。その昔、北方の異民族は茶に乳製品を混ぜたというし、四川の人は石灰を入れたというが、どれも野蛮な飲み方であって、責めるまでもない。」

第四七四条

【原文】

羅廬茶解、茶通仙靈、然有妙理。

【和訳】

明の羅廬『茶解』には「茶は神仙に通じる存在であり、深いことをわたりを内包している」とある。

第四七五条

【原文】

山堂夜坐、汲泉（手烹）煮茗。至水火相戰、如（儼）聽松濤、傾瀉入杯（甌）、雲光激灑。此時（二段）幽趣、故難與俗人言矣。

【和訳】

『茶解』には次のようにもある。「夜半に山中の寺院に座り、泉の水を汲んで茶を煮る。釜の中で水が火に煽られ、松林を吹き抜ける風のような沸き立つ音が聞こえる。茶碗に湯を注ぐと、碗中に広がる雲のような景色に陽光が差し込んで輝く。この幽雅な趣きは、もとより俗人と語るのは難しい。」

第四七六条

【原文】

顧元慶茶譜、品茶八要、一品、二泉、三烹、四器、五試、六候、七侶、八助。

【和訳】

明の顧元慶『茶譜』（清の喻政『茶書全集』所収の『茶譜』提要の誤り）には次のようにある。「茶の品評には八つの要点がある。第一は茶葉の品質、第二は水の風味、第三は湯の沸かし方、第四は

器の良し悪し、第五は茶の淹れ方、第六は火加減の適否、第七はとも茶を味わう仲間、第八は茶の功績である。」

第四七七条

【原文】

張源茶錄、飲茶以客少爲貴、（客）衆則喧、喧則雅趣乏矣。獨啜曰幽（神）、二客曰勝、三四曰趣、五六曰汎、七八曰施。

【和訳】

明の張源『茶録』には次のようにある。「茶を飲む際、来客は少ないのがよい。客人が多いとやかましく、やかましいと趣に欠ける。一人で飲むのを『幽（もの静かに楽しむ）』といい、客人と二人で飲むのを『勝（茶の風味が勝る）』といい、三、四人が集まり飲むのを『趣（趣がある）』といい、五、六人で飲むのを『汎（にぎやかすぎる）』といい、七、八人で飲むのを『施（他人に茶を施す）』という。」

第四七八条

【原文】

醞不宜早、飲不宜遲。醞早則茶神未發、飲遲則妙馥先消。

【和訳】

『茶録』には次のようにもある。「茶を注ぐ頃合いは早すぎてもならず、飲む頃合いは遅すぎてもいけない。注ぐのが早いと茶葉の風味を引き出すことができず、飲むのが遅いと精妙な香りが失われてしまう。」

第四七九条

【原文】

雲林遺事、倪元鎮素好飲茶。在惠山中、用核桃、松子肉和眞粉成小碗如石狀、置于茶中〔飲之〕、名曰清泉白石茶。

【和訳】

明の顧元慶『雲林遺事』には次のようにある。「元の倪瓚（字は元鎮）は平素より茶を好んだ。彼は惠山（現在の江蘇省無錫市にある山）にいた時、クルミと松の実、小麦粉を混ぜて石のような塊をつくり、茶に入れて飲み、これを清泉白石茶と名付けた。」

第四八〇条

【原文】

聞龍茶箋、東坡云、蔡君謨嗜茶、老病不能飲、日烹而玩之、可發來者之一笑也。孰知千載之下有同病焉。余嘗有詩云、年老耽彌甚、

脾寒量不勝。去烹而玩之者幾希矣。因憶老友周文甫、自少至老、茗椀薰爐、無時暫廢。飲茶日有定期、旦明、晏食、禺中、晡時、下春、黃昏、凡六舉、而客至烹點不與焉。壽八十五、無疾而卒。非宿植清福、烏能畢世安享。視好而不能飲者、所得不既多乎。嘗蓄一龔春壺、摩挲寶愛、不啻掌珠。用之既久、外類紫玉、內如碧雲、眞奇物也。後以殉葬。

【和訳】

明の間龍『茶箋』には次のようにある。「宋代の蘇軾はこのように言っている。『蔡襄（字は君謨）は茶を好んだが、老いて病がちになり茶を飲むことができなくなった。それでも毎日茶を煮て楽しみ、訪ねてきた人々に笑われた』と。千年の後、同じ病にかかる者がいようななど、彼らは知るよしもなかっただろう。私はかつて『年老いて耽ること弥いよ甚しきも、脾寒くして量るに勝えず（年をとってますます茶に熱中するようになったが、脾臓が弱ってしまったのでわずかな茶を量って飲むことすらできない）』という詩を詠んだ。飲むことを目的とせず、ただ楽しむために茶を煮る者は稀だろう。そこで思い出したのは長年の友人の周文甫である。彼は少年の時から老年に到るまで、茶碗と香炉を一度たりとも使わないことはなかった。茶は毎日決まった時間に飲み、明け方、夕食時、昼近く、午後遅く、日没時、黄昏時の六回であり、來客があつて茶を煮

るのはこの数に入れなかった。そして齢八十五にして、病を患うこともなく亡くなった。この清らかな楽しみは長い間なさなければ、終生享受することができようか。茶を好むのに飲むことができないう者からみれば、周文甫が得た楽しみは多いに決まっている。彼は眞春の手になる急須を収蔵しており、まるで寶石のようにいつも撫でて大事にしていた。この急須は大切に使い込まれて、表面は紫玉のように、内側は青空の雲のように美しく、実に珍しいものであった。彼が亡くなると、ともに埋葬された。」

第四八一条

【原文】

快雪堂漫録、昨同徐茂吳至老龍井買茶。山民十數家、各出茶。茂吳以次點試、皆以爲贗、曰、眞者甘香而不冽、稍冽便爲諸山贗品。得一二兩以爲眞物、試之、果甘香若蘭。而山民及寺僧反以茂吳爲非、吾亦不能置辨。偽物亂眞如此。茂吳品茶、以虎邱爲第一、常用銀一兩餘購其斤許。寺僧以茂吳精鑒、不敢相欺。他人所得雖厚價、亦贗物也。子晋云、本山茶葉微帶黑、不甚青翠。點之色白如玉、而作寒豆香、宋人呼爲白雲茶。稍綠、便爲天池物。天池茶中雜數莖虎邱、則香味迥別。虎邱、其茶中王種耶。芥茶精者、庶幾妃后、天池、龍井、便爲臣種、其餘則民種矣。

【和訳】

明の馮夢禎『快雪堂漫録』には次のようにある。「昨日、私は徐茂吳（名は桂）とともに老龍井に行き茶を買った。この時、現地の山にある十數軒の家が、それぞれ栽培した茶葉を出してきた。茂吳は一つ一つ点でて試飲し、どれも偽物だとした。彼が言うに、本物は甘く爽やかな香りがあり冷たさが無い。少しでも冷たいのは他の山の偽物であると。一、二兩ほど本物と思われる茶を入手して試飲してみたところ、たしかに蘭のようなよい香りが立ち上った。しかし、現地の人々や寺の僧は茂吳のほうが誤っていると、私はその是非を判別することができなかった。偽物とは、このように本物を覆い隠してしまうのである。茂吳は茶を格付けして虎邱（現在の江蘇省蘇州市）のものを第一とし、いつも銀一兩余りで一斤ほどを購入していた。寺の僧は茂吳が茶の鑑別に詳しいので、騙そうとはしなかった。他の人が入手したものは高い値段であっても偽物であった。私の友人である楽子晋はこう言っている。『虎邱の茶葉はわずかに黒色を帯びており、それほど青くはない。点ててみると、茶湯の色は玉のように白く、エンドウマメの香りがする。宋代の人々はこれを白雲茶と呼んでいた。一方、やや緑がかかった茶葉は天池山（現在の江蘇省蘇州市にある山）の産である。天池の茶に虎邱の茶が数葉交じるだけで、風味は全く異なる。虎邱の茶は、茶の王と言ってよいかもしれない。羅芥（現在の浙江省湖州市にある村）の

品質の良い茶は、后妃と言つてよいだろう。天池と龍井の茶は家臣、その他の茶は庶民である』と。」

第四八二条

【原文】

熊明遇^{（羅峯）}茶記、茶之色重、味重、香重者、俱非上品。松羅香重、六安味苦、而香與松羅同。天池亦有草萊氣、龍井如之。至雲霧則色重而味濃矣。嘗啜虎邱茶、色白而香、似嬰兒肉、眞『稱』精絶。

【和訳】

明の熊明遇『羅峯茶記』には次のようにある。「茶の中でも色や味、香りが濃すぎるものは、品質が良くない。松羅（現在の安徽省黃山市にある山）の茶は香りが濃く、六安（現在の安徽省六安市）の茶は味が苦く、香りは松羅と同様である。天池の茶は香りに雑草の臭気があり、龍井（現在の浙江省杭州市にある村）の茶もこれに似ている。雲霧の茶（湖南省衡陽市にある衡山の高所に産する茶）に至つては色も濃く味も濃い。かつて私は虎邱の茶を飲んでみたが、茶湯は白くて香り高く、赤ん坊の肌のような香りで、まさに絶品と呼ぶべきものであった。」

第四八三条

【原文】

邢士襄茶説、夫茶中着料、碗中着果、譬如玉貌加脂、蛾眉染黛、翻累本色矣。

【和訳】

明の邢士襄『茶説』には次のようにある。「茶葉に香料を加えたり、茶碗に茶菓子を加えたりするのは、整った地顔にわざわざ化粧を施し、濃い眉を書き加えるようなもので、かえつて自然本来の美しさを損なつてしまふ。」

第四八四条

【原文】

馮可賓^{（茶牋）}茶宜無事、佳客、幽坐、吟咏、揮翰、倘伴、睡起、宿醒、清供、精舍、會心、賞鑒、文僮。茶忌、不如法、惡具、主客不韻、冠裳苛禮、葷肴雜陳、忙冗、壁間案頭多惡趣。

【和訳】

明の馮可賓『茶牋』には次のようにある。「茶に適しているのは、俗事に追われない生活、気心の知れた客人、静かで趣のある環境、詩の吟詠、書画の揮毫、のんびり気ままな散歩、寝起きや二日

酔い、花や石など清玩にかなう文房飾り、静かな部屋、茶事を理解する心、趣に富む書画骨董の鑑賞、もの静かで気の利く下男である。思むべきは、正しい作法によらず淹れた茶、粗悪な茶道具、主人と客人の気が合わないこと、官界での交際やしきたりのように瑣末な礼を気にする交際、生臭物が雑多に並ぶ食事、忙しく慌ただしい生活、部屋や机上に俗悪なものを多く陳列することである。」

第四八五条

【原文】

謝在杭五雜組、昔人謂、楊子江心水、蒙山頂上茶。蒙山在蜀雅州、其中峯頂尤極險穢、虎狼蛇虺（蛇虺虎狼）所居、采得（得采）其茶、可蠲百疾。今山東人以蒙陰山下石衣爲茶當之、非矣。然蒙陰茶性亦冷、可治胃熱之病。

【和訳】

明の謝肇淛（字は在杭）『五雜組』には次のようにある。「昔の人は『楊子江心の水、蒙山頂上の茶（水は揚子江の中心のものが良く、茶は蒙山の頂上のものが良い）』と言っている（元の李徳載『茶肆に贈る』の一句）。蒙山は蜀の雅州（現在の四川省雅安市）にあり、なかでも中峰の頂は特に険しく、猛獸や毒蛇が跋扈している。ここで摘んだ茶は、諸病を除くことができる。今は山東の人が

蒙陰山（現在の山東省臨沂市にある山）の麓に生える苔を蒙山茶とするが、これは誤りである。ただし、蒙陰の茶は性質が寒冷であり、胃の炎症を治すことができる。」

第四八六条

【原文】

凡花之奇香者皆可點湯。遵生八牋云、芙蓉可爲湯。然今牡丹、薔薇、玫瑰、桂、菊之屬、采以爲湯、亦覺清遠不俗、但不若茗之易致耳。

【和訳】

『五雜組』には次のようにもある。「おしなべて香りの良い花は、茶として淹れることができる。（明の高濂の）『遵生八牋』には『芙蓉は茶湯とすることができる』とある。現在ではボタンやバラ、ハマナス、キンモクセイ、キクなどを摘んで茶湯とするが、これらも清らかで俗気がない。ただし、茶葉ほど入手が容易ではない。」

第四八七条

【原文】

北方柳芽初茁者、采之入湯、云其味勝茶。曲阜孔林楷木、其芽可烹飲。閩中佛手柑、橄欖爲湯、飲之清香、色味亦旗槍之亞也。又

或以菘豆微炒、投沸湯中、傾之、其色正緑、香味亦不減新茗。偶宿
荒村中、覓茗不得者、可以此代也。

【和訳】

『五雜俎』には次のようにもある。「北方では、芽吹いたばかりの
柳の芽を摘み、湯を注ぐ。その風味は茶よりも良いという。曲阜
（現在の山東省曲阜市）の孔林にあるカイノキの芽も茶として飲む
ことができる。福建ではブッシュユカンやカンランを茶としており、
口に含むと爽やかな香りがあり、色や味も上質な茶葉とそれほど遜
色がない。また、緑豆を少し炒めて沸騰した湯に入れる。しばらく
すると、鮮やかな緑色を呈し、風味も新茶に劣らない。たまたま辺
鄙な村落に泊まって茶葉を手でできないことがあれば、これらを代
用することができる。」

第四八八条

【原文】

穀山筆塵、六朝時、北人猶不飲茶、至以酪與之較、惟江南人食之
甘。至唐始興茶稅、宋元以來、茶目遂多。然皆蒸乾爲末、如今香餅
之製、乃以入貢、非如今之食茶、止采而烹之也。西北飲茶、不知起
於何時。本朝以茶易馬、西北以茶爲藥、療百病皆瘥、此亦前代所未
有也。

【和訳】

明の于慎行『穀山筆塵』には次のようにある。「六朝の時、北方
の人はまだ茶を飲むことがなく、酪（乳製の飲料）と茶を比べるほ
どであり、江南の人だけが茶を飲んで美味とした。唐代になると茶
税を課すようになり、宋や元の時代以降、茶の品種は次第に増加し
た。しかし、この頃は茶葉を蒸し乾かしてから粉末とし、今の香炭
のような形状に加工してから都に献上した。このように、当時の茶
は今の喫茶のように、摘んだ葉のまま淹れるわけではなかった。西
北の異民族が茶を飲むようになったのは、いつの頃からかわからな
い。わが明国は茶の交易を通じて馬を手に入れ、西北では茶を薬と
しており、どのような病気でも治療することができる。このような
状況は、歴史上なかったことである。」

第四八九条

【原文】

金陵瑣事、思屯乾道人、見萬磁手軟膝酸、云、係五藏皆火、不必
服藥、惟武夷茶能解之。茶以東南枝者佳、採得烹以澗泉則茶豎立、
若以井水卽橫。

【和訳】

明の周暉『金陵瑣事』には次のようにある。「仙人の呂洞賓は万

磁という老人の手足に力が入らないのを見て『これは五臓の火の気が強くなっていただけで、薬を服用する必要はない。武夷の茶を飲めば治る』と言った。茶は東南の方角に枝が伸びているのが良い。これを摘み、山間の湧き水で煮ると縦に浮き、井戸の水で煮ると横に浮く。』

第四九〇条

【原文】

六研齋筆記、茶以芳冽洗神、非讀書談道、不宜褻用。然非真正契道之士、茶之韻味亦未易評量。(余)嘗笑時流持論、貴嘶聲之曲、無色之茶。嘶近於啞、古之遠梁遏雲、竟成鈍置。茶若無色、芳冽必減。且芳與鼻觸、冽以舌受、色之有無、目之所審。根境不相攝、而取衷於彼、何其悖耶、何其謬耶。

【和訳】

明の李日華『六研齋筆記』には次のようにある。「茶はその芳香や美味によつて精神を清らかにするためのものであり、書物を読み道理を語るのでなければ、軽々しく飲んではならない。こうであるから、真に道理に合致した人物でなければ、茶の情趣を評価することも難しい。かつて私は世俗の人々の見解、すなわちかすれた歌声や鮮やかな色合いのない茶を貴ぶことを笑い飛ばしていた。かすれ

た歌声は声が出ないのと同じである。古の遙か遠くまで伸びやかに響き渡る歌声は、ついに打ち捨てられたのである。鮮やかな色合いのない茶は、香りも味も必ず劣る。しかも、香りは鼻で嗅ぎ、味は舌で感じ、色の有無は目で観察する。色、音、香、味、感触、状況の『六境』と、これらを感じとる目、耳、鼻、舌、身体、意識の『六根』とは、互いに関連するものではない。しかし、一方の性質をもう一方によつて証明することに、何の矛盾や誤りがあるだろうか。』

第四九一条

【原文】

虎邱以有芳無色、擅茗事之品。顧其馥郁、不勝蘭芷、止與新剝荳花同調、鼻之消受、亦無幾何。至於入口、淡於勺水。清冷(冷)之淵、何地不有、乃煩有司章程、作僧流極楚哉。

【和訳】

『六研齋筆記』には次のようにもある。「虎邱の茶は、芳香があつて無色であり、その名を馳せる一品である。しかし、その香りはラシヤヨロイグサほどではなく、しおれた部分を取り除いた豆の花と同じで、嗅いでも大した香りはない。口に含んでも、その味は汲んだ水より薄い。また、深くてたえた清冽な水など、どこにでもある

のだ。役人がわざわざ法を定め、僧侶を鞭打ってまで収奪するほどの茶ではない。」

第四九二条

【原文】

紫桃軒雜綴、天目清而不醜、苦而不齏、正堪與縹流激滌。筍蕨、石瀨、則太寒儉、野人之飲耳。松羅極精者、方堪入供、亦濃辣有餘、甘芳不足。恰如多財賈人、縱復蘊藉、不免作蒜酪氣。分水貢芽、出本不多、大葉老根、潑之不動。入水煎成、畚有奇味。薦此茗時、如得千年松栢根、作石鼎薰燎、乃足稱其老氣。

【和訳】

明の李日華『紫桃軒雜綴』には次のようにある。「天目山（現在の浙江省杭州市にある山）の茶は、香りが清らかで味は薄くなく、苦味があるものの害はないので、僧侶が口をすすぐのに丁度よい。タケノコやワラビ、石瀨の茶はあまりにみすぼらしく、村野の人々が飲むにすぎない。松羅山（現在の安徽省黃山市にある山）の茶のなかでも極めて上質なものだけは都に献上するに堪えるが、濃く辛い風味が後にひき、甘みや香りが足りない。これはあたかも莫大な財産を有する商人が、穏やかで修養のある振る舞いをして、欲望や生臭さを消しきれないようなものである。分水（現在の浙江省杭

州市桐廬県）の献上茶は、もとより生産量が少ない。葉や根が成熟しきってしまったものは、湯を注いでも葉が開かない。しかし、水に投じて煮るとすぐれた風味がある。このような茶を人に勧める時は、千年を経た松栢の根を入手して石の鼎で燻し焦がすように慎重に煮れば、その成熟した濃厚な風味と釣り合う。」

第四九三条

【原文】

鷄蘇佛、櫚欖仙、宋人咏茶語也。鷄蘇、即薄荷、上口芳辣。櫚欖久咀回甘、合此二者、庶得茶蘊。曰仙曰佛、當於空玄虛寂中、嘿嘿證入。不具是舌根者、終難與說也。

【和訳】

『紫桃軒雜綴』には次のようにもある。「『鷄蘇仏』や『櫚欖仙』とは、宋代の人が茶を詠じる時に用いた茶の別称である。鷄蘇は薄荷のことで、口に含むと芳香と辛味がある。櫚欖は長く噛んでいると甘みが出てくる。この二つを合わせることで、茶の奥深い風味を表現しようとしたのだろう。『仙』や『仏』というのは、幻想や虚無静寂のなかで、黙々と実証しようとしたのだろう。舌の感覚に鈍感な者とは、このことを語り難い。」

第四九四条

【原文】

賞名花、不宜更度曲。烹精茗、不必更焚香。恐耳目口鼻互牽、不得全領其妙也。

【和訳】

『紫桃軒雜綴』には次のようにもある。「美しい花を鑑賞するのに、さらに歌曲を演奏させるのはよろしくない。上質な茶を煮るのに、香を焚く必要はない。耳目や口鼻の感覚が互いに干渉して、その妙を体得できなくなる。」

第四九五条

【原文】

精茶不宜潑飯、更不宜沃醉。以醉則燥渴、將滅裂吾上味耳。精茶豈止當爲俗客吝。倘是日汨汨塵務、無好意緒、卽烹就、寧俟冷、以灌蘭。斷不令俗腸汚吾茗君也。

【和訳】

『紫桃軒雜綴』には次のようにもある。「上質な茶を飯にかけてはいけないし、酒に酔った時に飲んではなおさらいけない。酔うと口が乾燥し喉が乾くので、茶の風味を損なってしまう。上質な茶は、

俗気のある客人だけに惜しむものではない。もし毎日俗事に忙し

く、落ち着いた情緒でなければ、上質な茶を煮ても、冷めるのを待つて蘭の花に注ぐだけである。私ならば、俗気を帯びた胃腸ですばらしい茶を汚すようなまねは決してしない。」

第四九六条

【原文】

羅山廟后芥精者、亦芬芳回甘。但嫌稍濃、乏雲露清空之韻。以兄虎邱則有餘、以父龍井則不足。

【和訳】

『紫桃軒雜綴』には次のようにもある。「羅山廟の後方に産する上質な羅芥の茶も、香り高く後味がよい。しかし風味がやや濃く、朝露や晴れ渡った空のような清々しさに欠ける。このため羅芥の茶の位置づけは、虎邱の茶の兄とするには十分過ぎるほどだが、龍井茶の父とするには物足りない。」

第四九七条

【原文】

天地通俗之才、無遠韻、亦不致嘔噦寒月。諸茶黝黯無色、而彼獨翠綠媚人、可念也。

【和訳】

『紫桃軒雜綴』には次のようにもある。「世の中の俗な人物には奥深い情趣がないものの、冴えわたる清らかな月の光を汚すほどではない。各地の茶葉の色味はくすんでいるが、羅刹の茶葉だけは誰しもが好む鮮やかな緑色を呈しており、愛でるべきものである。」

第四九八条

【原文】

屠赤水云、茶於穀雨候晴明日采製者、能治痰嗽、療百疾。

【和訳】

（屠隆『考槃余事』には次のようにある。）「屠隆（号は赤水）は『茶のなかでも、春の穀雨の時期、晴れた日に摘んで加工したものは、痰や咳を改善し、様々な病を治すことができる』と述べている。」

第四九九条

【原文】

類林新咏、顧彦先曰、有味、如臛飲而不醉。無味、如茶飲而醒焉。醉人何用也。

【和訳】

清の姚之駟『類林新咏』には次のようにある。「西晋の顧榮（字は彦先）は『味があるとは、肉の汁物のように飲んでも酔うことがないものことである。味が無いとは、茶のように飲めば目が覚めるものことである』と述べている。人を酔わせるものは何の役に立つだろうか。」

第五〇〇条

【原文】

徐文長秘集致品、茶宜精舍、宜雲林、宜磁瓶、宜竹竈、宜幽人雅士、宜衲子仙朋、宜永晝清談、宜寒宵兀坐、宜松下、宜花鳥間、宜清流白石、宜綠蘚蒼苔、宜素手汲泉、宜紅粧掃雪、宜船頭吹火、宜竹裏飄煙。

【和訳】

明の徐渭『刻徐文長先生秘集』の「致品」には次のようにある。「茶を飲むのに適しているのは、静かな部屋、隠棲できる場所、磁器の瓶、竹のかまど、雅趣や文事を解する人物、道士や僧侶、日中の清談、寒い夜に一人静坐すること、松林に差し込む月光の下、花が咲き誇り鳥のさえずる自然、清らかな泉や川の流れ、色鮮やかに苔むした光景、女性が白い手で水を汲むこと、美しく化粧を施した

女性が雪を掃くこと、船首に明かりをとすこと、竹林にかまどの煙が立ち登ることである。」

第五〇一条

【原文】

芸窓清玩、茅一相云、余性不能飲酒、而獨耽味于茗。清泉白石、可以濯五臟之汚、可以澄心氣之哲。服之不已、覺兩腋習習清風自生。吾讀醉鄉記、未嘗不神遊焉。而間與陸鴻漸、蔡君謨上下其議、則又爽然自失（釋）矣。

【和訳】

明の胡文煥『芸窓清玩』には次のようにある。「茅一相はこう述べている。『私は生まれつき下戸なので、ただ茶の味だけを楽しんできた。清らかな湧き水は五臓の汚れを洗い流し、心の内の智慧を明晰にすることができる。そして湧き水で淹れた茶を絶えず服用すれば、両脇を涼しく風が通り抜けるように感じる。私は唐の王績が記した『醉郷記』を読み、心を常に酔の境地に遊ばせていた。しかし、その合間に陸羽（字は鴻漸）や蔡襄の茶に関する議論を読んでみると、ふと迷いが晴れて酒への心残りが解消した」と。」

第五〇二条

【原文】

三才藻異、雷鳴茶、産蒙山中頂。雷發收之、服三兩換骨、四兩爲地仙。

【和訳】

清の屠粹忠『三才藻異』には次のようにある。「雷鳴茶は、蒙頂山（現在の四川省雅安市にある山）の中頂に産する。毎年、春啓蟄の前後、雷鳴がとどろく時に摘む。三兩を服用すると仙人の骨相に変わり、四兩を服用すると地仙（人間の世界に住む仙人）になる。」

第五〇三条

【原文】

聞雁齋筆記、趙長白自言、吾生平無他幸、但不曾飲井水耳。此老于茶、可謂能盡其性者。今亦老矣、甚窮、大都不能如曩時、猶摩挲萬卷中作茶史。故是天壤間多情人也。

【和訳】

明の張大復『聞雁齋筆記』には次のようにある。「趙長白は自ら『私の人生にはこれといって幸せなことはなかったが、それでも井戸水を飲んだことはなかった』と言った。この老先生は茶の品評に

において、その天賦の個性を發揮し尽くしたと言えるだろう。現在、彼は老いてとても貧しく、生活の大部分は昔に及ばない。しかし、それでも万巻の書物を読み『茶史』を編纂した。この広い世の中でも感性の豊かな人物である。」

第五〇四条

【原文】

袁宏道瓶『花』史、賞花、茗賞者上也、譚賞者次也、酒賞者下也。

【和訳】

明の袁宏道『瓶史』には「花を鑑賞するのに、茶を味わいながらの鑑賞は上、語り合いながらの鑑賞は中、酒を飲みながらの鑑賞は下である」と記されている。

第五〇五条

【原文】

茶譜、博物志云、飲眞茶、令人少眠。此是實事、但茶佳乃效、且須末茶飲之。如葉烹者、不效也。

【和訳】

『茶譜』（明の徐光啓『農政全書』の誤り）には次のようにある。「『博物志』には『本物の茶を飲むと、眠気が解消される』とある。これは事実だが、茶が上質でこそ効果があり、しかも粉末にした茶を飲む必要がある。葉のまま煮たものは効果がない。」

第五〇六条

【原文】

太平清話、琉球國亦曉烹茶。設古鼎于几上、水將沸時、投茶末一匙、以湯沃之。少頃奉飲、味甚清香。

【和訳】

明の陳繼儒『太平清話』には次のようにある。「琉球国の人々も茶事に通じている。机上に古い鼎を置き、そろそろ湯が沸くという頃合いに、茶碗に茶の粉末を一匙入れて湯を注ぐ。しばらくしてから人に勧めるが、味はとても清らかで香り高い。」

第五〇七条

【原文】

藜牀瀋餘、長安婦女有好事者、曾（於）侯家睹（一）彩牋（題）曰、一輪初滿、萬戸皆清。若乃狎處衾幃、不惟辜負蟾光、竊恐嫦娥

生妒。涓于十五、十六二宵、聯女伴同志者、一茗一爐、相從卜夜、名曰伴嫦娥。凡有冰心、竚垂玉允。朱門龍氏拜啟。陸潛原

【和訳】

明の陸潜原『藜床瀋余』には次のようである。「長安に好事家の女性がおおり、かつて貴人の家で色鮮やかな詩箋を見かけてこのように記した。『一輪の月がようやく満ち、家々に清らかな月光が降り注いでおります。人々が仲睦まじく寝るならば、この美しい月光に背くのみならず、月の女神である嫦娥も嫉妬することでしょう。そこで十五、十六日の両夜を選び、ともに茶を楽しむ女性を招くことにいたします。各自が茶と風炉を持ち寄り、ともに一晚を明かす、この会を伴嫦娥（嫦娥のお供をする）と名付けました。清らかな雅趣を好む方々の参加をお待ちしております。朱門の龍氏、拝啓。陸潜原。』」

第五〇八条

【原文】

沈周跋茶録、樵海先生眞隱君子也。平日不知朱門爲何物、日偃仰於青山白雲堆中、以一瓢消磨半生。蓋實得品茶三昧、可以羽翼桑苧翁之所不及、即謂先生爲茶中董狐可也。

【和訳】

明の沈周は張源の『茶録』に記した跋文のなかで次のように述べている。「樵海先生（張源）は本物の隠者である。普段、富豪や貴人が何たるかを知らず、日々静かな山奥の生活を悠然と楽しみ、茶のみを愛して人生の半分を費やした。思うに先生は確かに喫茶の真理を悟っており、桑苧翁（陸羽）の不足を補った。茶の歴史において、春秋時代の董狐のように卓越した歴史家と言えよう。」

第五〇九条

【原文】

王暉快説續記、春日看花、郊行一二里許、足力小疲、口亦少渴。忽逢解事僧邀至精舍、未通姓名、便進佳茗、踞竹牀連啜數甌、然后言別、不亦快哉。

【和訳】

明末清初の王暉『快説続記』には次のようである。「春に花を見ようと、郊外を一、二里ほど歩いたところ、足がやや疲れ、喉も少し乾いてきた。すると、世事に通暁した僧侶に出会い、僧坊に連れて行ってもらった。互いの名も名乗らぬうちに、上質な茶を勧められる。竹の長椅子に坐って立て続けに数杯を飲み干し、そして別れを告げた。実に楽しいことではないか。」

第五一〇条

【原文】

衛泳枕中秘、讀罷吟餘、竹外茶烟輕颺。花深酒後、鐺中聲響初浮。箇中風味誰知、盧居士可與言者。心下快活自省、黃宜州豈欺我哉。

【和訳】

明の衛泳『枕中秘』には次のようにある。「本を読むのをやめて詩を吟じていると、竹林の外に茶を煎じる煙がゆらゆらと立ち上る。花の咲き誇る庭園の奥で酒を楽しんだ後、鍋からぐつぐつと波立つ音が聞こえて湯が沸き始める。その中の味わいを誰が理解するだろうか。ただ、唐の盧全なら語り合うこともできよう。（宋の黃庭堅の「品令・茶詞」に）「心下の快活、自ら省みるべし（心の中の楽しさは、自分自身で振り返る）」とあるように、茶の妙趣は飲むことでしかわからないのだ。黃庭堅ほどの人物がどうして私を欺くことがあるのか。」

第五一一條

【原文】

江之蘭文房約、詩書涵聖脉、草木棲神明。一草一木、當其含香吐艷、倚檻臨窓、眞足賞心悅目、助我幽思。亟宜烹蒙頂石花、悠然啜

飲。

【和訳】

清初の江之蘭『文房約』には次のようにある。「詩書には聖人の血脈が内包されており、草木には自然の精神や智慧が宿っている。草木の一つ一つには、すばらしい香りと鮮やかな色彩がある。欄干に寄りかかり窓の側で鑑賞すれば、心も耳目も楽しむのに十分であり、私の内心にある豊かな感情や発想を喚起してくれる。このような時、蒙頂山の石花茶を煮て、ゆっくりと味わうのが極めてよい。」

第五一二條

【原文】

扶輿沆瀣、往來於竒峯怪石間、結成佳茗。故幽人逸士、紗帽籠頭、自煎自啜。車聲竿腸、無非火候。苟飲不盡、且漱棄之、是又呼陸羽爲茶博士之流也。

【和訳】

『文房約』には次のようにもある。「意気投合した人と、互いに支え合って奇怪な景色の険しい山を歩き来し、縁あって上等な茶を摘みとる。このため、隠者は薄絹の頭巾で頭を包み、手づから茶を煎じて一人飲む。曲がりくねった小道で猫車を押すようなゴロゴロと

いう音が聞こえてきたら、火加減は丁度よい。淹れた茶を飲みきれず、口をゆすいで吐き出すのは、陸羽を茶の博士と呼ぶ人々のようなものである。」

第五一三条

【原文】

高士奇天祿識餘、飲茶或云始於梁天監中、見洛陽伽藍記、非也。按吳志韋曜傳、孫皓每讌饗、無不竟日。曜不能飲、密賜茶甌以當酒。如此言、則三國時已知飲茶矣。逮唐中世權茶、遂與煮海相抗、迄今國計賴之。

【和訳】

清の高士奇『天祿識余』には次のようにある。「ある人が言うに、喫茶は南朝梁の天監年間（五〇二～五一九）に始まり、『洛陽伽藍記』に見えるというが、これは誤りである。『三国志』の『吳志・韋曜伝』によると、吳主の孫皓は宴を催すたびに、朝から晩まで止めることがなかった。だが、韋曜は酒が飲めなかったため、孫皓はこっそりと茶を下賜して酒の代わりにさせたという。この記載の通りならば、三国時代にはすでに喫茶が知られていたことになる。そして唐の中頃になると、茶税の収入は塩税と拮抗するようになり、今に到るまで国の財政は茶に依存している。」

第五一四条

【原文】

中山傳信錄、琉球茶甌頗大、斟茶止二三分。用菓一小塊、貯匙内。此學中國獻茶法也。

【和訳】

清の徐葆光『中山伝信録』には次のようにある。「琉球の茶碗は非常に大きく、茶を注ぐ際は二、三割に止める。そして、一かけらの茶菓子を用意し、茶匙に置く。これは中国の茶の勧め方を学んだのである。」

第五一五条

【原文】

王復禮茶説、花晨月夕、賢主嘉賓、縱談古今、品茶次第、天壤間更有何樂。奚俟膾鯉魚羔、金疊玉液、痛飲狂呼、始爲得意也。范文正公云、露芽錯落一番榮、綴玉含珠散嘉樹。鬪茶味今輕醍醐、鬪茶香分薄蘭芷。沈心齋云、香含玉女峯頭露、潤帶珠簾洞口雲。可稱茗若知己。

【和訳】

清の王復礼『茶説』には次のようにある。「鮮やかな花の咲く朝

や清らかな月明かりのさす夜、賢明なる主人と素晴らしき客人が一堂に会し、古今の事を語り明かし、茶の上下を品評する。天地の間にこれ以上楽しいことがあろうか。豪華な料理や美酒がそろうのを待ち、痛飲し騒ぎあかしてようやく満足する必要などあろうか。宋代の范仲淹は『章岷従事の鬪茶歌に和す』詩に『露芽錯落一番の栄え、玉を綴り珠を含み嘉樹に散ず（枝に入り乱れるのはこの春最初の新芽、まるで玉や真珠を連ねて散りばめたよう）や『茶味を闘わせて醍醐を軽んじ、茶香を闘わせて蘭芷を薄くす（茶の味を競えばどれほど旨い飲み物も話にならず、茶の香りを競えば香草など何の価値もない）』と詠んでいる。また、沈涵（号は心齋）は『王適庵の武夷茶を恵るに謝す』詩に『香りは含む 玉女峰頭の露、潤いは帯ぶ 珠簾洞口の雲（香りは武夷山の玉女峰の頂上に降りる露を含み、潤いは珠簾洞の入り口に沸き起こる雲の気を帯びている）』と詠んでいる。彼らは岩茶を深く知る人物といつてよいだろう。」

第五一六条

【原文】

陳鑑虎邱茶経注補、鑑親采數嫩葉、與茶侶湯愚公小焙烹之、眞作

荳花香。昔之鬪虎邱茶者、盡天池也。

【和訳】

清の陳鑑『虎邱茶経注補』には次のようにある。「私は手づから茶の若葉数枚を摘み、茶友達の湯愚公と小さなほいろで乾燥させ、それから煮てみた。すると、本当に豆の花の香りを発した。以前売られていた虎邱の茶は、すべて天池の茶であった。」

第五一七条

【原文】

陳鼎滇黔紀遊、貴州羅漢洞、深十餘里。中有泉一泓、其色如黝、甘香清冽。煮茗則色如渥丹、飲之唇齒皆赤、七日乃復。

【和訳】

清の陳鼎『滇黔紀遊』には次のようにある。「貴州（現在の貴州省）の羅漢洞は深さが十余里ある。その中に大きく深い泉があり、水はやや黒く、風味がよく清らかで冷たい。茶を煮ると、茶湯は朱砂のように鮮やかな朱色となる。これを飲むと唇や歯が赤く染まり、七日ほどでもとに戻る。」

第五一八条

【原文】

瑞草論云、茶之爲用、味寒。若熱渴、凝悶胸、目澀、四肢煩、百

節不舒、聊四五啜、與醍醐甘露抗衡也。

【和訳】

(清の康熙帝勅撰『御定淵鑑類函』所収の)『瑞草論』には次のようにある。「茶の効用は、味が寒であることによる。発熱による喉の乾き、胸のつかえ、目の疲労や乾燥、四肢のだるさ、関節の不調などは、茶を四、五杯飲めばよい。その効果は、牛乳を精製した醍醐や天から降る甘露と変わらない。」

第五一九条

【原文】

本草拾遺、茗味苦、微寒、無毒。治五臟邪氣、益意思、令人少卧。能輕身、明目、去痰、消渴、利水道。

【和訳】

唐の陳藏器『本草拾遺』には次のようにある。「茶の味は苦く、性質はやや寒で、毒はない。五臓の邪気を除き、思考を明晰にし、睡眠を浅くする。身体を軽くし、目をはっきりさせ、痰を切り、喉の渴さを癒やし、排尿を促す。」

第五二〇条

【原文】

蜀雅州名山茶(蒙頂茶)有露銕芽、錢芽、皆云火前者、言采造於禁火之前也。『火後者次之。』又有枳殼芽、枸杞芽、枇杷芽、皆治風疾。又有皂莢芽、槐芽、柳芽、乃上春摘其芽、和茶作之。故今南人輸官茶、往往雜以衆葉、惟茅蘆、竹箬之類、不可以入茶。自餘山中草木芽葉皆可和合、而椿柿葉尤奇。眞茶性極冷、惟雅州蒙頂出者溫而主療疾。

【和訳】

(五代十国の毛文錫『茶譜』や宋の唐慎微『政和証類本草』)には次のようにある。「蜀の雅州に産する名山茶には露銕芽や錢芽と呼ばれるものがあり、いずれも火前、すなわち寒食節の前に摘んで加工した茶である。火後の茶の品質はこれに次ぐ。また、カラタチやクコ、ビワの芽は関節の痛みや麻痺を治すことができる。ほかにもサイカチ、エンジュ、シダレヤナギの芽は、初春に摘んで茶葉に混ぜられる。このため、今の南方の人が官衙に納入する茶には、しばしば茶以外の葉が混じっている。ただ、チガヤやアシ、タケの葉は茶葉に混ぜてはならない。これら以外の、山中に生える草木の芽や葉はどれも茶葉に混ぜることができ、チャンチンやカキの葉は特によい。本物の茶の性質は極めて冷だが、雅州の蒙頂山に産するもの

は温であり、主に病を治療することができる。」

第五二二条

【原文】

李時珍本草、〔服〕葳靈仙、土茯苓〔者〕、忌飲〔麪湯〕茶。

【和訳】

明の李時珍『本草綱目』には「生葉の葳靈仙や土茯苓を服用する者は、茶を飲んではならない」とある。

第五二三条

【原文】

羣芳譜、療治方。氣虚頭痛、用上春茶末調成膏、置瓦蓋内覆轉、以巴豆四十粒、作一〔二〕次燒烟燻之、曬乾乳細、每服一匙。別入好茶末、食後煎服立効。又赤白痢下、以好茶一斤炙搗爲末、濃煎一二盞、服久痢亦宜。又二便不通、好茶、生芝蔴各一撮、細嚼、滾水冲下、即通。屢試立効。如嚼不及、搗爛、滾水送下。

【和訳】

明の王象晋『群芳譜』には次のようにある。「茶葉の処方。氣虚や頭痛は、初春に摘んだ茶葉の粉末を糊状にし、陶器の碗に入れて

何度もかき混ぜる。そしてハズの種子を四十粒、一度煙で燻し、日干しして細かくすり潰し、先の茶とともに毎回一匙を服用する。このほか、上質な茶葉の粉末を入れ、食後に煎じて服用するとすぐに効果がある。また、赤白痢（便に血や膿が混じる症状）に対しては、上質な茶葉一斤を炙つて乾かし、よく搗き碎いて粉末とし、濃い目に一、二杯を煎じる。これを服用すると、繰り返す痢疾（腹痛や膿血をともなう下痢症状）にも効果がある。このほか、尿や便の排泄が困難な症状では、上質な茶と生のゴマをそれぞれひとつまみ口に含み、よく噛み碎き、湯で服用すると、排出できるようになる。この処方では繰り返し試すと効果がある。もしよく噛み碎く時間がなければ、細かくすり潰し湯で服用する。」

第五二三条

【原文】

隨見錄、蘇文忠集載憲宗賜馬總治泄痢腹痛方。以生薑和皮切碎如粟米、用一大錢〔盞〕并草茶相等煎服。元祐二年、文潞公得此疾、百藥不効、服〔予傳〕此方而愈。

【和訳】

『隨見錄』には次のようにある。「北宋の蘇軾『蘇文忠集』（北宋の沈括『蘇沈良方』の誤り）にはこのような記載がある。『唐の憲

宗は馬総に下痢や腹痛を治療する処方を下賜した。これはシヨウガを皮ごと、粟粒や米粒ほどの大きさにみじん切りし、大型の銅錢と、銅錢と同量の焙じた茶葉を煎じて服用するものであった。北宋の元祐二年（一〇八七）、文彦博が同じ症状を患い、様々な薬を服用しても効果がなかったものの、先の処方の薬を服用したところ完治した。」

續茶經卷下

男 紹良 較字